



大本山永平寺



歳朝さいちよう

新しい年を迎え、まずは皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

元旦の早朝三時、起床の合図である振鈴の音が山内に響き渡ります。前日の大晦日夕刻絶え間なく訪れていた参詣の方もこの時間になると落ち着き、永平寺は静かな朝を迎えます。

暁天坐禅、朝課、そして元旦の特別行持が肅々と勤められた後、菩提座に一同集まり皆で精進のおせち料理やお雑煮をいただきます。雲水にとっては永平寺で正月を迎えられたことへの喜びを味わうことが出来る瞬間です。

食事が済むころには再び山内がにぎやかになってきます。午後からは世界の和平や国土安穩、今年一年の皆さまのご多幸を祈り「転読大般若」がとめられます。大勢の雲水によって大般若経六〇〇巻という膨大な量の経典を左右正面にパラパラと振るようにして誦よみすすめられます。

この経典の大切な教えとして「無所得」の行が説かれています。見返りを求めることなく只ただひたすらに坐禅、看経、作務等を勤めていくところにこそ功德があるとされるのです。

永平寺で修行できる喜びを感じながら一心に読み上げる転読大般若。歳朝を迎えるのにふさわしい行持です。



大本山總持寺



大遠忌予修法要の幕開け

歳が改まり、読者の皆さまには清々しい新春をお迎えのことと存じます。

總持寺では、大梵鐘の撞き初めを皮切りに新年の行持が始まります。鐘楼堂で読経し導師が一声撞き初めをした後、僧侶たちは行列を作り向唐門に進みます。そして普段は閉じている向唐門の大きな扉が開き、行列は仏殿に向かいます。

新年を祝う最初の行持は仏殿での祝禱じゆとうふぎ誦経です。

続いて大祖堂に於いて、禪師さま御親修のもと「転読大般若」の元朝大祈禱が行われます。六〇〇巻の大般若経を左右に振り広げて、国内外の平和と人々のご多幸を祈る様子は圧巻です。

初詣の祈禱は大祖堂の他に、三宝殿・大黒尊天・大駐車場でも行われ、三が日で約二十万人を超える参拝者が訪れます。

さて、曹洞宗においては本年より峨山さま六百五十回大遠忌の「予修法要」が国内各地や海外で行われます。

また、總持寺でも大遠忌記念参拝期間を設け、焼香師さまをお迎えしての報恩法要が始まります。

宗門挙げての「峨山さまの大いなる足音に耳を澄ます」一年が、いよいよスタートしました。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

敬老日葉のせいか眠気さす

愛媛県 井上 征郎

評 飄々とした軽妙さ、気の緩みか眠気がきた。それを葉のせいとするおとぼけ、洒脱さ。俳句の俳の極みであろう。

柿食べて我家恋しと泣く母よ

秋田県 伊藤 昌子

評 病院に居られるのか、施設に居られるのか、老いと共に迫る淋しさに柿の赤色は古里の色。我家の記憶に泣くのである。

◆彼岸花猫半眼に石畳

愛知県 松井 曉美

◆小さく見ゆ玉入れの籠天高し

兵庫県 安原 正久

◆鮎落ちて川面は風の音ばかり

埼玉県 橋本 永子

◆今日の月遺影に見せる戸を開けて

岩手県 上沖 貞子

◆鈴虫の隈なく響く図書館に

福井県 西尾 康子

◆一燭に亡き父母のゐる障子かな

栃木県 小村 翠香

◆長き夜を西行和歌に親しめと

東京都 柳沢 敬子

◆定年の歩にある重み露万袋

愛知県 田中 澤子

◆菊枕点滴に刻むいのちかな

大阪府 古澤 龍堂

◆枯蠅^{かれちゅう}螂父の親にも似てゐたり

埼玉県 小林 茂之

*選者吟

初乗や探す切符は左手に

五灰子

*作句小見

明けましておめでとうございます。

高浜虚子は「俳句の写生とは四季の萬物の相を見て、その中からある映像を取り出して来る事をいふのである」と『虚子俳話』で語っています。暮らしの中でそれを見つけてます。

本年も皆さまの作品を楽しみにお待ちしております。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

息子と二人畑帰りの農道の真ん前に在る十
五夜拜む
静岡県 青山 清子

評 畑や田など農地の間を通る農道には視界を妨げる物が少ない。「農道の真ん前」という表現が視界のいかにも開けた様子を端的に言い得ている。一日の農作業を終え十五夜の月を子と拜む、平和の象徴のような景。永く続くことを願う。

避難してはや二年の冬迎えいつ帰れるか思うふ
るさん
北海道 小賀坂博紀

評 三年前の東日本大震災で被災されたのだろう。いまだに故郷に帰れず、当たり前の日常が取り戻せないでいる焦慮と悲しみがこもる。北の冬の厳しさも伝わってくる。

◆東京の五輪誘致に国沸けど置いてきぼりの福島案ず
福島県 大槻 弘
◆夏が過ぎ孫が帰ったその後には線香花火一本残れり
新潟県 浅井 正浩

◆蓮の葉に六の修行をすることく蛙座りて瞑想しおり
岩手県 池田 眸

◆薔薇と猫黒地に浮かぶブックカバーをかける文庫はもう
決めている
茨城県 太田 弘美

◆マンシヨンの四角い空を眺めつつ野に咲きゐたるコスモ
ス飾る
東京都 長谷川 瞳

◆定年後なれども上司に頭下げ稲刈り休みを願う夢見る
秋田県 竹内 善郎

◆雁の棹次々渡る波のごと奥入瀬川に秋を惜しめば
宮城県 鎌田登喜子

◆曼珠沙華手折りて挿しぬ二、三輪その四、五日のはかな
きものを
三重県 小阪 晋

◆故里に戻りて九年見送りし人指折れば両手に余る
広島県 小畑 宣之

◆露もちて紫深きほたる草踏みなずつつ朝の畦ゆく
長野県 毛涯 潤

*選者詠

長明の庵の小さき確かめぬ小雪舞うなかそ
の方丈を
ちづ

*作歌小見

方丈は三・三メートル四方。畳の縦二枚分にも足りない。
天井も低く寒い季節に訪ねたので感慨一入であった。

小阪さんの一首も「二、三輪」から「四、五日」の数字の
扱い方に、説得力があり興味深かった。